

113) <sup>あじさい</sup>紫陽花の思い出

6月の雨は煙って           しっとりと街を包んだ  
<sup>たそがれ</sup>黄昏の街を背にして       石段を登ってゆけば  
道ぞいの<sup>あじさい</sup>紫陽花の花       とりどりに色を競いて  
過ぎし日は心をめぐり       6月は静かに過ぎる

懐かしき雨の景色に       あこのころの想いが映る  
傘の中人目を避けて       唇づけを交わしたあの日  
紫陽花は今日のごとくに   それぞれに花を咲かせて  
やがて来る夏に向かって   雨の中心は燃えた

プリズムの光のように   美しく輝きながら  
思い出のひとつひとつが   咲くように花は染まって  
花びらのひとつひとつが   散るように恋は終わった  
<sup>とき</sup>季節を経て染まり行く花   <sup>とき</sup>歳月を経て思い出になる

ひとつきの夢から覚めて   カタツムリ<sup>いずこ</sup>何処へ向かう  
ことばなく殻をひきずり   雨の中あの日を想う  
<sup>おもいで</sup>追憶の君の<sup>まなざし</sup>眼差し       どことなくものがなくて  
紫陽花の花のごとくに   哀しみが心を染めた